

埼 葛 退 職 校 長 会 会 報

第 55 号

令和元年 7 月 発行
発行責任者
相 澤 勝 寿

つれづれなるままに

埼葛退職校長会

副会長 橋 本 久 雄

平成一九年三月三〇日(金)の夕刻、教職員の皆さんに見送られてから一二年が経ってしまった。退職後、勤めていた幼稚園長と併任する形で事務局の末席を汚して以来、退職校長会には大変お世話になっている。

小生は、教諭時代は技術・家庭科の技術分野の教員だったので、書いたりしゃべったりすることは余り得意ではない。

そんな折、先輩の先生から論語の勉強会を勧められ、月一回のペースであったが高校の漢文以来の漢字の世界を学び始めた。

そうこうする内、県立北教育センターで御一緒した行田市のN先生の名文を埼玉新聞で目にするようになった。N先生に電話すると「橋本さん、思ったり、感じたことをそのまま文にすればいいんですよ」。何とか出来そうだの感触を得て、一念発起、埼玉新聞の投稿欄「つれづれ」に投稿した。三年前の三月二十七日に、「モズの早贄」と題する拙文が掲載された。

以来、令和元年五月四日に「サクラが植えられた訳」の掲載まで三〇回程、「つれづれ」等に掲載された。ありがたいことに多くの先輩の校長OBから手紙等をいただき、退職後の関係や結び付きに感謝の一言である。

特に、私からは遠い存在であった久喜市のH先生からは、掲載される度に丁寧なはがきをいただき、次もやるぞという気持ちになった。児童・生徒は勿論のこと我々大人も褒められるとやる気が出ることを痛感した。

論語にあるのですが、「辞達而

特 集

新会員一人一言
定期総会
長寿会員紹介

己矣」辞は達するのみ。言葉や文章は、通じるだけでよいをいつも念頭に置きたい。

自分の経験談になって恐縮だが、会の一層の発展のため尽力したい。

第六回「市町研修」実施報告

福利厚生部長 山下 浩

本年度の市町研修は、好転に恵まれ六月一九日(水)に「なまずの里」と「幕末の吉川」―老舗料亭を訪ねた志士達等―を研修テーマに掲げ、吉川市内の老舗料亭「糘家」で開催されました。尚、当日は六二名の参加をいただきました。

研修の主な内容等は左記の通りです。

一、講話 「なまずサミット」

講師 吉川市長 中原恵人様

吉川では、なまずに光をあて、町興しを推進。例えば、なまずの親子像設置。なまずの養殖。地酒「なまず御膳」の販売等。これらの活動を全国へ発信したいと考えなまずで町おこしをしている他県

の自治体と連携して、二〇一七年二月第一回「なまずサミット」を吉川市で開催。「全国なまずの日」を七月二日と制定。

二、講話 「幕末の志士と料亭」
講師 元吉川市教育長

幕末の志士達について、四六名の写真入りの資料説明。吉川町は、中川の河岸場として栄えた。当時、越谷では着道楽。吉川では食い道楽と言われ、「吉川に来てうなぎ・なまず食わずなかれ」とも言われた。志士達の中で割烹店を訪れた人は、近藤勇、勝海舟等があげられる。

講話終了後、糘家の社長さんから所蔵絵画の解説をいただきました。

今回の研修担

当吉川市の皆様には、ご尽力をいただき、充実した研修ができましたこと、心より感謝申し上げます。
(文責 中村 孝)



令和元年度
定期総会

令和元年度の定期総会が、五月
一日（土）、春日部市視聴覚セ
ンターで開催された。
一 開会のことば 橋本久雄副会長

二 国歌斉唱

指揮 萩原征而理事
三 黙祷 ご逝去された一九名の
会員を悼み黙祷

四 会長あいさつ 相澤勝寿会長
五 新会員紹介 二九名の紹介
六 新会員代表者あいさつ 洪谷修造会員

七 議事

(一) 平成三〇年度事業報告並び
に決算・監査報告 承認
(二) 役員一部改選について 承認

(三) 令和元年度努力点・事業計
画（案）並びに予算書（案）
承認
審議

(四) 「彩の国教育の日」協賛埼
葛地区現職・退職校長教育推
進協議会の開催について
・・・別項

(五) 令和元年度埼葛退職校長会
定期総会について

期日 六月七日（金）
会場 ウエスタ川越大ホール

(六) その他 六月一九日（水）

開催の「市町研修」の説明

吉川市 山田陽一理事

八 長寿会員祝賀 白寿 一名

米寿 一二名

喜寿 一八名

一七名

九 感謝状贈呈
代表あいさつ

萩原征而理事

一〇 来賓祝辞

埼玉県退職校長会

加村智代副会長

東部教育事務所

長井圭子 所長

東部地区教育長協議会

山西 実 会長

春日部市教育委員会

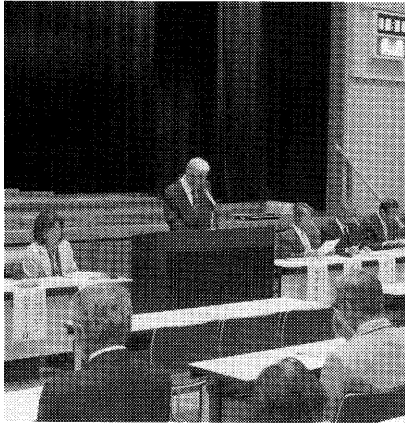
鎌田 亨 教育長

埼葛小学校長会

榎本 隆 会長

一一 閉会のことば

濱野紀生副会長



ぶるとね

八潮の詩人・

土橋治重

松元徹寿

四年（一九九二）詩集「根」で、第二五回日本詩人クラブ賞を受賞。この間、多くの有望な詩人を詩壇に送り出す。

（歴史小説家として）

氏はその故郷山梨の武將武田信玄に関する多数の著書を始め、多くの歴史小説を書いている。主著のひとつ「物語と史蹟をたずねて」シリーズ（成美堂出版）は日本史を扱った大衆書として人気を博した。私も、

シリーズの一冊であ

る「平将門」を図書

館で借りて読んでみ

た。多くの写真があ

り、文章も平易で読

みやすいものであつ

た。

（八潮市における

活動）

氏は、八潮文芸懇

談会会長を務め、

「文芸八潮」の発刊に関わり、昭和

五七年（一九八二）発行の「八潮の

民俗資料二」では、市史編さん委員

を代表して、あいさつ文を書いている。

市民文化講演会において講演を

したこともあった。

平成五年（一九九三）六月二〇日、

八四歳で永眠された。

参考文献 さきたま出版会発行

「荒川流域の文学」他

詩人として知られる土橋治重氏は、明治四二年（一九〇九）四月三日、山梨県の農村に生まれた。大正一三年（一九二四）アメリカに移民していた父を頼って渡米。苦学しながら現地の高校、大学を卒業した。在米中より詩を書き、

サンフランシスコ

に日本人の文芸作

家協会を作ったり

した。昭和八年

（一九三三）二四

歳の時、帰国。そ

の後、朝日新聞に

入社。鎌倉支局に

勤め、川端康成等

の鎌倉文士と親し

む。以後、二五年間、新聞記者生活

を送る。昭和四九年（一九七四）六

五歳の時、東京の世田谷から八潮市

大瀬に引越し、以後この地に住ま

う。

（詩人として）

昭和二四年（一九四九）「日本未

来派」に属し、詩を発表していく。

昭和三六年（一九六一）詩誌「風」

の創刊同人となる。主な詩集に

「花」「異聞詩集」等がある。平成



土橋治重（どばし・じじゅう）